

日本の伝統・文化を継承する若者たち

# 明日への扉

Door to Tomorrow

400年の永きにわたり  
継承されてきた一国の宝の未来が、  
私たちの手にかかっています。

## 日光東照宮修復・漆塗職人

大森 憲志 氏



Kenji Omori

日光東照宮修復・漆塗職人。1986年栃木県宇都宮市生まれ。鶴見大学文化財保存学科卒業後、(財)日光社寺文化財保存会へ。国宝などの修復を通して漆塗技術に磨きをかけている。

世界遺産にも登録された、日本を代表する木造建築、日光東照宮。江戸初期の建築・美術・工芸の粋を集めた豪華華麗な建造物の全土が、国宝や重要文化財に指定されている。

現在、日光東照宮は「平成の大修理」の真っ最中。2007年から、50年に一度の大規模な修復作業が(財)日光社寺文化財保存会の技術者たちの手により進められているのだ。

日光東照宮の建造物の表面には雨風に強く、防腐効果も高い漆が塗られている。それを塗り直し、表面を再び強固にするのが漆塗職人である、大森憲志さんの仕事。大森さんは大学在学中に(財)日光社寺文化財保存会の採用試験に合格し、卒業と同時に社寺の修復にあたる漆塗技術者としての道を歩み出した。

### 一 漆塗職人の道を 選んだきっかけは？

大森「大学では、文化財保護などについて学ぶ『文化財保存学科』に在籍していました。そこであるとき漆を見て、光沢の美しさに魅せられ、特徴や効能を一から研究したのですが、知れば知るほど漆の虜になってしまい、『ぜひ、漆に関わる仕事をしたい』と、漆の道を選びました。やはり好きで入った世界なので、漆を使って文化財をきれいに修復できる仕事にやりがいを感じています」

大森さんが取り組んでいるのは「蹴込」の修復。蹴込とは、本社を囲む全長160mもの国宝「透塀」の下部部分を指し、そこには花や鳥などが彫刻されている。全部で120体もあり、それらを一一つ取り外して作業を行う。

漆塗の工程は、新たに塗る漆の浸透



鳥が彫刻されている下の部分が蹴込

### 二 国宝相手の仕事に プレッシャーは 感じませんか？

大森「もちろん感じています。しかし、それは国宝だからというわけではありません。私たちにあって、日光東照宮にあるものは全て同じです。どれもかけがえない宝と思いつつながら仕事に臨んでいます」

刻苧彫りを終わると、いよいよ漆を用いた作業に入る。生漆にテレピン油を混ぜたものを塗り込んで彫刻全体の表面を固めた後、「刻苧」を施す。

刻苧とは、刻苧彫りをした箇所に特殊な漆を埋めて、彫刻を限りなくオリジナルに近い状態に復元する、漆塗職人にとって腕の見せどころとなる作業だ。

特別に調査された漆をパテの要領で

# 懐かしくも美しい 日本の俳句

Heartful Haiku Poems

Vol.53

物ひとつ鳥の落とすや夏木立馬光



イラスト ひらいみも

東京都台東区の浅草寺裏を走る言問通りを歩いて、隅田川をこえる。橋は言問橋で、その先の業平橋とともに「伊勢物語」にちなむ名前である。京を離れて隅田川のはとりにまでやって来た男が、都鳥という見なれぬ鳥の名を聞かされて、「名にしおはばいざ」とはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」（在原業平・古今集・鞍旅）と詠んで、京の都に残してきた女性をはるかに偲ぶ。のちに物狂能の傑作「隅田川」に用いられて広く世間に浸透した。業平橋駅（東武鉄道）という名もその例だが、このたび完成した電波塔「東京スカイツリー」（墨田区押上）の最寄り駅であるために、「とうきょうスカイツリー駅」と改称。伝承はこうして表情を変えてゆく。

東洋大学教授 谷地快一

この地域は芭蕉庵があった深川に遠くないので、芭蕉伝承も多い。たとえば東駒形の芭蕉山桃青寺（臨濟宗）は古くは定林院とも東盛寺とも言ったが、芭蕉が滞在したという伝承を育てて今の名に落ち着く。「桃青」は芭蕉の俳号である。掲出句の作者馬光は、その伝説形成に役買った十八世紀前半の御家人で、芭蕉顕彰の俳人としてこの寺に葬られた。句は葉の茂りから何か落ちるものを見届けて、巣を営む鳥たちの平穏な暮らしを思いやっているのだろう。季節の「夏木立」は葉の茂った木々が集まっている風景をさす言葉で、一本の場合は「夏木」という。作品は「其箴」による。

## 日本の伝統・文化を継承する若者たち 「明日への扉」

わが国が世界に誇る、固有の伝統・文化の数々……

先人たちが築いてきた、

その知恵や技を受け継ぐ若者たちがいる。

夢を追いかけ日々研鑽する

彼らの「ひた向きで真摯な姿」と

普段の暮らしから垣間見える“素顔”をご紹介します。



動画コンテンツ「明日への扉」では、日本の伝統・文化を受け継ぐ若者たちの姿を、臨場感ある映像でご紹介。30人以上のバックナンバーがご覧いただけます。

Web版

パソコンやタブレット型端末など各種デバイスでご覧いただけます。  
<http://www.athome.co.jp/tobira/>

TV

ディスカバーチャンネル(CS)



冠番組

「アットホーム presents 明日への扉」 放映中  
毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン

ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中



彩色後の蹴込

盛り、指先に神経を集中させてなじませる。その出来栄は、一見どこに手を加えたのか分からないほどだ。続いて、漆のひび割れた部分に和紙を乗せて漆で接着させる「紙着せ」を行う。これは50年後、100年後に修復を担う職人へ、どこをどうやって修復したのかを伝える役割も果たしているという。次に弁柄漆を塗り重ね、金箔を一枚一枚貼り付けて刷毛で表面

## 二 将来、 どんな職人に なりたいですか？

大森「400年もの間受け継がれてきた日光東照宮の文化財が、これからどうなっていくのか、全ては私たち、修復に関わる人間にかかっています。日本の宝を次の世代にちゃんと継承していくためにも、常に愛情を持って文化財に接していきたいですね。そしてこれからも精進を重ねて、一人前として、当たり前前のを当たり前前にできる職人になりたいと思っています」

平成の大修理は2024年まで続く。それが終わるころ、大森さんはきつくと保存会の中核を担っていることだろう。そして次の大修理に向けて、着々と準備を始めているに違いない。

### 取材を終えて

今はただ、師匠や先輩を信じ、自分を信じ、これまでに修復を行ってきた職人が刻み込んだ技を忠実に再現していく。一つ一つの経験を糧に、明日への扉を開け、また二歩、夢に近づく。

熟練の職人に交じり、日々腕を磨いている大森さんが息抜きを兼ねて、仕事帰りに立ち寄るのが弓道場。3段の腕前ですが、日によっては矢が狙い通りに飛ばないこともあるそうです。そんなときは諦めずに、粘り強く矢を打ち続けるといふ大森さん。仕事にも、弓道にも、真摯に取り組み姿勢がとても印象的でした。

※2010年11月取材。掲載内容は取材当時のものです。



### 日光東照宮

栃木県日光市に位置する、徳川家康公を東照大権現（だいごんげん）として祀る神社。元和3年（1617年）、徳川二代将軍・秀忠によって建立された。当初は質素な社殿であったが、家康公が亡くなり20年後の寛永13年（1636年）に、三代将軍・家光の命により行われた「寛永の大造替（だいぞうたい）」により現在のよう豪華絢爛な姿となった。